

JFTP NEWS

Japan's Friendship Ties Programs



京都大学の同僚とハイキングを楽しんだジャイニさん（左）▶

Academic Journeys Rooted in Japan

特集

日本とつながる研究者

2025
07

- 01. JENESYS 2016参加者 ザイノリズアン・モハド・ジャイニさん(マレーシア)
- 02. JENESYS 2014参加者ロエル・ニーニョ・バウティスタさん(フィリピン)

【JFTP PRESS】

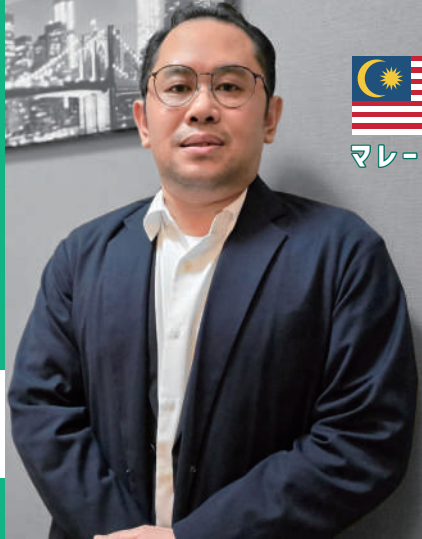
「事業横断同窓会」を開催しました

活躍するカナダのカケハシ同窓生を紹介するポッドキャスト

ISSUE

17

No.

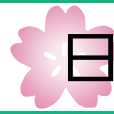


ザインルズアン・モハド・ジャイニさん

JENESYS

Mr. Zainorizuan Mohd Jaini

- ・ マレーシア・トゥン・フセイン・オン大学 土木工学・建築環境学部 土木工学科 上級講師(准教授)
- ・ 京都大学大学院 工学研究科 社会基盤工学専攻 構造工学講座 外国人共同研究者
- ・ 2016年度JENESYS参加者(経済)
- ・ 参加当時：社会人



日本で"の研究経験から両国の架け橋に

地震国の交通インフラに学ぶ

構造エンジニアとして高速道路のシステムをデザインしていたころ、マレーシア青年スポーツ省の知人からJENESYSのことを教えてもらいました。プログラムのテーマは交通で、私の専門分野とも直接関わるものでした。参加できると決まったときはとてもわくわくしたことを覚えています。

日本は自然災害が多いにもかかわらず、交通システムを長期間維持することが出来ています。JENESYSで名古屋環状2号線の工事現場を訪れ、設計と建設を担当する日本のエンジニアから直接話を聞いたことは、大変興味深い体験でした。私たちの国ではあまり地震が起きないため、日本に比べると設計がかなりシンプルです。地震の可能性をどのように考慮すればいいか知ることができたことは、私の視野を大きく広げてくれました。



▲ JENESYSで名古屋環状2号線の工事現場を訪問

京都大学での共同研究

JENESYS参加の数年後、橋構造の専門家である京都大学(以下、京大)の杉浦邦征教授と知り合い、彼の研究室のプロジェクトに参加しないかと声をかけてもらいました。共同研究者として2年間も日本に滞在することに最初は不安もありましたが、JENESYSで日本の交通における都市構造に興味を持ったこともあり、来日することを決めました。

実際に京都に住んでみると、ムスリムの私にとって働きやすく、住みやすい環境でした。



▲ 京大の共同研究者として参加したシンポジウムの様子

私が関わったプロジェクトは鋼構造物の疲労特性と温度特性に関わるものでしたが、世界中から集まった優秀な研究者と京大のオフィスでお互いの研究について議論し人脈を広げられたことは、素晴らしい経験となりました。

次世代への橋渡し

もともと私はエンジニアとして働いていたので、自分が研究者になるとは思いませんでした。こうしたキャリアの変化は、JENESYSで持続可能な都市構造のマネジメントについて多くの気づきをもたらしたことによるものです。

京大での勤務を終えて2024年秋にマレーシアに戻ってからは、トゥン・フセイン・オン大学に勤務しています。同時に、引き続き京大の共同研究者として、構造工学が専門の北根安雄教授に協力しています。マレーシアで教えている学生の何人かは私が京大を再訪するときに同行してくれて、マレーシアの工学とは異なる新しい知識を吸収し、日本人の友人をつくっていました。そうした教え子の姿を見るのはとてもうれしいです。さらに今後は、マレーシアで構造ダイナミクスのワークショップを開催し、日本の著名な先生方をお招きしてご講演いただく予定です。将来的には、マレーシアと日本の研究者がお互いの知識や技術を共有できるプラットフォームをつくりたいと考えています。



▲ マレーシアの大学の教え子と京都大学を訪れたジャイニさん(右)



ロエル・ニーニョ・バウティスタさん

Mr. Roehl Niño Bautista

JENESYS

- ・ フィリピン大学ディリマン校 メディア・コミュニケーション学部
放送コミュニケーション学科 助教授
- ・ 2014年度JENESYS参加者（メディア）
- ・ 参加当時：大学院生

メディアと文化でつなぐ日本とフィリピン

震災報道の姿勢に触発されて

私はメディア業界で長年働いてきました。現在はその経験を活かして、母校のフィリピン大学でデジタルメディアや日本研究を教えています。

JENESYSに参加したときは、大学院で日本について研究していました。仕事を辞めてメディアから少し離れていた時期でもあり、人生の岐路に立っていました。参加したプログラムのテーマは、私が働いていた「メディア」でした。訪れた横浜の日本新聞博物館では、東日本大震災の報道について学びました。岩手県の石巻日日新聞は津波の影響で新聞が印刷できなくなっても、手書きの壁新聞を制作して避難所の人々に情報を届け続けたと聞き、フィリピンで災害が起きたときに私たちは同じように取り組めるだろうかと考えさせられました。結果的に、この経験がメディア業界に戻るきっかけの一つとなりました。



▲ロエルさんが参加したJENESYSの様子

子供のころから日本文化が身近に

私は子供のころから日本文化に触れていました。漫画の「るろうに剣心」がきっかけで剣道を習い始めたのですが、他のメンバーになぜ剣道を始めたか聞いてみると、多くの人のきっかけは私と同じでした。そこから「るろうに剣心」がフィリピンの剣道の普及にどのように影響しているかについて研究することにしました。剣道はフィリピンでメジャーな競技ではありませんが、少しずつ競技人口は増えてきています。こうして執筆した日本のアニメ・ファンダムの大きな影響について示した論文は、私の最初の出版論文になりました。

フィリピンの日常に息づく日本

私は今年、フィリピン大学で「フィリピン文脈における日本のテレビ」という授業を開講しました。日本のテレビ番組はフィリピンの人々に多くの影響を与えています。日本で約50年前に放送された「超電磁マシン ボルテスV」というアニメはフィリピンで絶大な人気を誇っており、2023年には実写版「ボルテスV レガシー」がフィリピンで制作されました。私の最近の論文では、ボルテスVを切り口とした日本とフィリピンの二国間関係について紐解いています。越川和彦前在フィリピン日本国大使はアニメ版と実写版両方への愛をSNSで発信されたことから、地元メディアから「ボルテスV大使」と呼ばれるほど好意的に受け入れられました。外交官が文化作品のファンとして自分自身を表現することは珍しいと思いますが、ボルテスVは両国の交流を促進する重要な入り口なのかもしれません。

北東アジアの文化を考えると、フィリピンの人々は日本文化の影響がどれほど私たちの日常生活や意識に溶け込んでいるか気づいていないように感じます。私はこれからもメディアの視点から、その影響を顕在化させていきたいと思っています。



▲日本刀とポップカルチャーの講義後に学生と一枚

JFTP PRESS

～ JICE自主企画「事業横断同窓会」を開催しました～

JICEは2025年6月25日、「対日理解促進交流プログラム」の過去参加者のうち、現在日本に留学や就職などで滞在している同窓生をオフィスに招き、対面形式の事業横断同窓会を開催しました。昨年3月に続き2回目となる今回のイベントには、JENESYS、カケハシ・プロジェクト、MIRAIの同窓生が14か国から集まり、計46名（うち招へいプログラム参加者28名、派遣プログラム参加者18名）が参加しました。外務省や在京大使館からも来賓をお迎えし、和やかで心温まる交流のひとつきを過ごしました。

イベントでは、代表して5名の同窓生が登壇し、プログラム参加当時の思い出や来日時印象、現在の活動、そして将来の夢についても語ってくれました。

今回は「夏祭り」をテーマとし、チーム対抗のクイズ大会や輪投げ大会が行われ、七夕飾りや提灯で彩られた会場は大いに盛り上がりました。プログラムが異なる初対面同士でも積極的に交流し、最後には連絡先を交換するなど、「JICE」という出会いのプラットフォームを通じて新たなつながりも生まれました。同窓生からは「世界各国の人たちと話せて嬉しかった」「JENESYSの思い出話で盛り上がり、経験が今どう活かされているかを分かち合えた」など、多くのうれしい声が寄せられました。

JICEはこれからも、同窓生の皆さんの活躍を応援すべく、同窓会イベントやフォローアップ企画を通じて支援を続けてまいります。

大いに盛り上がったクイズ大会！



日本の輪投げに挑戦



最後は参加者みんなで記念撮影！



See you soon!

【速報】JENESYS Alumni Essay Contest 2025 結果発表！

JICEは2025年6月、過去にJENESYSに参加した同窓生を対象に、初のエッセイコンテストを実施しました。対象言語は英語と日本語。テーマは「私にとってのJENESYS」。国際交流がもたらした気づき・挑戦・つながりについて、同窓生が熱い想いを寄せてくれました。応募総数は計17か国から88作品でした。審査結果は、以下の通りです。

JENESYS ALUMNI
ESSAY CONTEST 2025

最優秀賞

● Roshan Bhandariさん (2018年度 JENESYS SAARC 参加者・ネパール)
「What JENESYS Means to Me」



優秀賞

● Aung Si Kyawさん (2022年度 JENESYS ASEAN 参加者・ミャンマー)
「How JENESYS Sparked my global connection and vision for empowering community」
● John Roger Maghuyopさん (2010年度 JENESYS 参加者・フィリピン)
「Change for the Better!」

※このほか、特別賞を若干名に贈呈。

受賞者のコメントならびに受賞作品については、今後のJFTP Newsでご紹介します。お楽しみに！

～活躍するカナダのカケハシ同窓生を紹介するポッドキャスト～

カナダ・アジア太平洋財団 (Asia Pacific Foundation of Canada, APFC) が配信する「カケハシ・カンパセーションズ」は、カケハシ・プロジェクトの同窓生をゲストに迎えるポッドキャストシリーズです。APFCは、カナダを対象にしたカケハシ・プロジェクトにおける外務省の拠出先国際機関です。ポッドキャストでは、同窓生たちがプログラムを通じて得た経験や、それが現在の自分にどのような影響を与えたかを振り返ります。

2025年1月に公開した第1回のゲストは、これまでオリンピックに3度出場し、2024年のパリオリンピックにおいてフェンシング・女子フルーレ個人で銅メダルを獲得したエレノー・ハーヴェイ (Eleanor HARVEY) さん (2017年度スポーツ招へい参加者)。カナダのフェンシング選手として初めてオリンピックでメダリストとなったエレノーさんは「カケハシはとても素晴

らしい体験でした！」と語りました。特に印象に残っている出来事はホームステイとのこと。「ホストファミリーは80代のご夫婦で、お互いに言葉は全く通じませんでしたが、絆を深めることができました。笑いと楽しさに満ち溢れた夜だったことを印象深く覚えています。スポーツだけに集中するアスリートとして日本に行っていたら、絶対にできない経験です」と当時を振り返りました。

ポッドキャストはAPFCのHPで聞くことができます。

URLはこちら↓

<https://www.asiapacific.ca/podcast/kakehashi>



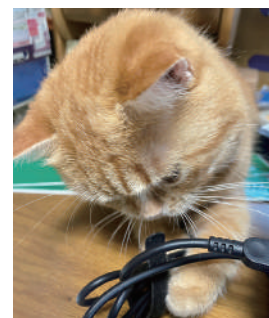
PODCAST



編集後記 - Editor's Note-

「JFTP News」制作こぼれ話 その三

「JFTP News」は、主に英語で行ったインタビューを日本語の記事にまとめています。毎回英語と日本語の壁にぶち当たり、時にはAIのサポートにも感謝しながら、同窓生たちのストーリーが魅力的に伝わるよう尽力しています。そんな決死の執筆中に邪魔…もとい癒しを与えてくれるのが、我が家の猫・かんた。パソコンのコードもかんたにとっては恰好のおもちゃです(壊さないでね)。こうした過程を経て発行される誌面を通じて、本事業が同窓生に与えるインパクトを多くの読者に届けられるよう、今後も努めてまいります！



一般財団法人日本国際協力センター (JICE) は、主に日本国政府や地方自治体、企業からの依頼に応じ、世界各国の社会開発課題に資する人材育成のお手伝いや日本についての理解を促進する事業を展開しています。

JFTP News 第17号 2025年7月31日発行

編集・発行：一般財団法人 日本国際協力センター (JICE) 国際交流部
EMAIL: kokusaikoryu@jice.org

JICEについて詳細はHPをご覧ください。

<https://www.jice.org>

●本誌掲載の記事、写真などの無断転載を禁じます。

©2025 JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION CENTER

